

中立形接続構文とテ形接続構文

益岡隆志（神戸市外国語大学、国立国語研究所客員）

要旨

日本語の複文構文は連用複文構文と連体複文構文に大別されるが、連用複文構文にどの範囲の複文構文が含まれるかについては検討を要する。とりわけ、並列的な性格を持つ複文構文と連用複文構文の関係については詳しく検討する必要がある。本発表では、日本語の中立形接続構文とテ形接続構文における接続形式の分化という観点から並列と連用の関係を探ってみたい。

キーワード：並列と連用、中立形とテ形、語用論的な派生、意味領域、棲み分け、
接続形式の分化

1 はじめに

日本語の複文構文は連用複文構文と連体複文構文に大別されるが、連用複文構文（(1)）にどの範囲の複文構文が含まれるかについては検討を要する。とりわけ、並列的な性格を持つ複文構文と連用複文構文の関係については詳しく検討する必要がある。

Croft(2001)は coordination と subordination は連続的であり、両者の性格を兼ね備えるものとして cosubordination が認められるという。cosubordination の例として取り上げられているのは converb 構文である。日本語は converb 構文に当たるテ形接続構文（(2)）を持っているが、さらに、それと類義的な構文として中立形接続構文（(3)）がある。

- (1) [[..... 述語 - 接続形式]..... 述語]
- (2) 駅前に白いビルがあって、そのビルの1階に銀行がある。
- (3) 駅前に白いビルがあり、そのビルの1階に銀行がある。

（注：(2) (3) 及び (7) ~ (14) は日本語記述文法研究会編（2008）から引用）

coordinationとsubordinationがどのような関係にあるかを考えようとするとき、日本語の中立形接続構文・テ形接続構文は興味深い考察材料を提供する（三上（1953）、久野（1973）、言語学研究会・構文論グループ（1989a,b)）。本発表では、これら2つの構文（動詞が述語の場合）を比べることにより、並列と連用の関係を探ってみたい。

2 動詞の形態

中立形とテ形（三上（1953）、渡辺（1971）、城田（1998）、Myhill and Hibiya（1988）、
益岡（2000、準備中））

◇中立形：語幹に準じる（準語幹形）⇒名詞性

◇テ形：中立形+「テ」⇒動詞性の保持

通時的変化（坪井（2010））

「中立形」と複合

複合名詞など

「テ形」と動詞連結

補助動詞構造

3 両構文の異同

名詞の並列

無助詞 vs. 助詞介在＝単純列挙 vs. 関係づけ

- (4) 海、山、まち一ロケ地になった神戸を歩こう（「神戸シネマップ」）
- (5) 海と山とまち
- (6) 神戸と私

◇中立形接続構文：構成要素を単純に列挙する構文

- (3) 駅前に白いビルがあり、そのビルの1階に銀行がある。

語用論的に継起/因果（連用関係）を表す

（東森・吉村（2003）、Blakemore and Carston（2005））

動的・無意志的などが条件

- (7) 手を洗い、おやつを食べた。
- (8) 悲しい話を聞き、涙がこぼれ落ちた。

◇テ形接続構文：「テ」の付加により連用関係を明示（関係づけ）

連用関係の主要な意味領域を包含する

[並列・時間・論理(広義因果)・様態]

- (2) 駅前に白いビルがあって、そのビルの1階に銀行がある。
- (9) 手を洗って、おやつを食べた。
- (10) 悲しい話を聞いて、涙がこぼれ落ちた。
- (11) 参加者は、幹事を入れて8人だ。
- (12) 悪事を見て見ぬふりをする。
- (13) 立っておしゃべりをした。
- (14) タクシーに乗って駅まで行った。

両構文の重複領域の棲み分け

◇並列

単純列挙は中立形接続構文で表す（久野（1973）、新川（1990））

- (15) 太郎はよく {勉強し／？勉強して}、よく遊ぶ。（久野（1973））
- (16) 著者が一方では「日本の黒い霧」のような作品を書き、他方では推理小説に新風をもたらした文学的必然みたいなものも、…。（平野謙「黒地の絵」解説）

- (17) 僧院の前に立って、宿舎の方を振り返ると、遠くにエベレスト、ローツェの白い峰が見え、その手前にアマダブラムの二つの峰が、堂々たる貫録で天を衝いている。(井上靖「星と祭」)

◇継起

- (18) よく {考えて/(?)考え} お返事いたします。

◇因果

テ形：動的でなくても成立するといった条件の緩和

- (19) 多くの同窓生に {会えて/(?)会え} 嬉しかった。

4 接続形式の分化

両構文の関係

中立形接続構文：並列関係及びそこからの語用論的派生としての連用関係を表示

テ形接続構文：「テ」の付加により連用関係を全面的に表示

並列関係は排除されない (広義連用関係)

[並列・時間・論理(広義因果)・様態] という広義連用関係の意味領域

中立形接続構文にある連用関係表示 (萌芽的なもの) がテ形接続構文で全面的に展開

「接続形式の分化」(益岡 (2007、近刊))

条件構文 (レバ・タラ(バ)・ナラ(バ))、ダケ構文 (ダケニ・ダケアッテ)

書き言葉と話し言葉

話し言葉では、中立形接続構文が縮小の傾向にあり、テ形接続構文による連用関係 (広義連用関係) の表示が完成しつつある。

5 おわりに

本発表の要点

日本語において：

◇複文構文における「並列」と「連用」には、形と意味の関係からは対立性と連続性という二面性が認められる。そこで、「連用」には並列を除く狭義のものと並列を含む広義のものが考えられる。(cf. 渡辺 (1971)、Croft (2001))。

◇中立形接続構文は並列関係の表示を基本とし、そのうえで派生的に連用関係 (継起・因果) を表す。

◇テ形接続構文は「テ」の付加により中立形接続構文に派生的に存在する連用関係表示を全面的に展開し、広義連用関係 (並列・時間・論理 (広義因果)・様態) を表す。

参考文献

- 内丸裕佳子 (2006) 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2巻1号.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 菊地朗 (2008) 「修飾」『英語学モノグラフシリーズ5巻：叙述と修飾』研究社
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 言語学研究会・構文論グループ (1989a) 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい」言語学研究会編『ことばの科学2』むぎ書房.
- 言語学研究会・構文論グループ (1989b) 「なかどめ—動詞の第一なかどめのばあい」言語学研究会編『ことばの科学3』むぎ書房.
- 新川忠 (1990) 「なかどめ」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐる」『複文の研究(上)』くろしお出版.
- 城田俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房.
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論序説』ひつじ書房.
- 塚本秀樹 (2004) 「文法体系における動詞連用形の位置づけ：日本語と韓国語の対照研究」佐藤滋・堀江薫・中村渉編『対照言語学の新展開』ひつじ書房.
- 坪本篤朗 (1998) 「文連結の形と意味と語用論」赤塚紀子・坪本篤朗『モダリティと発話行為』研究社.
- 坪井美樹 (2010) 「現代日本語を知るための日本語史研究—動詞テ形・タ形の成立をめぐる」砂川有里子他編著『日本語教育研究への招待』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法第6巻：複文』くろしお出版.
- 堀江薫&プラシヤント・パラデシ (2009) 『言語のタイポロジー』大修館書店.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版.
- 益岡隆志 (近刊) 「原因理由を表すダケニとダケアッテの分化」『日本語・日本学研究』1号、東京外国語大学国際日本研究センター.
- 益岡隆志 (準備中) 「動詞の活用・再考」
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 (くろしお出版復刊、1972).
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房.
- Alpatov, V. M. (1995) "Converbs in Japanese." Haspelmath, M, and E. König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*. Mouton de Gruyter.
- Ariel, M. (2008) *Pragmatics and Grammar*. Cambridge University Press.

- Blakemore, D. and R. Carston (2005) "The pragmatics of sentential coordination." *Lingua* 115.
- Comrie, B. and S. A. Thompson (2007) "Lexical nominalization." Shopen, T. (ed.) *Language Typology and Syntactic Description*. Cambridge University Press.
- Croft, W. (2001) *Radical Construction Grammar*. Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. and A. Y. Aikhenvald (2009) *The Semantics of Clause Linking*. Oxford University Press.
- Hasegawa, Y. (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage*. CSLI Publications and Kurocio Publishers.
- Haspelmath, M. (1995) "The con-verb as a cross-linguistically valid category." Haspelmath, M, and E. König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*. Mouton de Gruyter.
- Jacobsen, W. M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kurocio Publishers.
- König, E. (1995) "The meaning of converb constructions." Haspelmath, M, and E. König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*. Mouton de Gruyter.
- Myhill, J. and J. Hibiya (1988) "The discourse function of clause-chaining." Haiman, J. and S.A. Thompson(eds.) *Clause Combining in Grammar and Discourse*. John Benjamins.